

海濱の一幕

娘 甲、乙

男 甲、乙

浴客の婦人 甲、乙

浴客の老人 甲、乙

書生 甲、乙

若者 甲、乙

小僧 甲、乙

娘甲 (娘乙の肩につかまるやうにして歩きながら) まんだ早いせぬだか、人が遊んで居ないわよ。何だかきまりが悪いよう、こんなに早く髪なんか結つて。(頭に手をあてて見る。兩人立止まる)

娘乙 權ふもんか、人は人だによ、こちとらは爲ることをして、済ますことを済まして來んだもの。大晦日だとして忙しいと極つたものぢやないよ。町がこんなに静かなのは、不景氣だからさ。

娘甲 不景氣だつて、嫌だよ此の人は、定さん

の口眞似なんか止してお呉れよう。

娘乙 だつて不景氣ぢやないか。見せい、あの寶來屋の店なんか景物の看板はつかし幅を利かせて、客は一人もありやしないぞよ。

娘甲 それや然だけれど、でも寶來屋の店は菱好きよ。御覽よ、しよつちう東京から珍らしいものを取り寄せてゐるに。天下堂だつて、名産堂だつて、并べてる繪葉書からして、何時も同じものばかりで、寄つて見る氣もしないがよ。寶來屋の店だけは、前を通ると自然に足が留まるでないか。あの右の窓に井べてあるもの、なんて好い色合なんだらう。下の黄色いぼかしになつてゐるのは、電燈の笠だとよ。それよりか、懸つてるリボン！ 緋紅色はいゝわね。クリームの上に縞の這入つたのが見えるだらう？ 高々な色合ねえ。空氣草履だつて、好いがあるよ。表が水淺黄の天鵝絨で、鼻緒が縹の切れで。東京ぢや、もうあんなのでも廢つてるのかしら。何んなのが今流行つてるのだらう、行つて見たいわねえ。(う

つとりとして海の方を見る眼が潤みを持つて美しい。又店の方を眺めて) ほら、遠くから見ても、あの窓だけ眼を明いたやうに明るいだらう？ 輝いてるだらう？ 此の町中で一番あの店だけが活きてるやうだ。他はみんなどろんとして、眠つてるやうだによ。

娘乙 それでゐて客が來ないんだから、尙ほ不景氣ぢやないかよ。

娘甲 そら御覽よ、お前がそんな事を言ふから、早速お客が一人來た。

娘乙 長芋を賣りに出た小僧つ子だよ。

娘甲 だつてお客でないか。蕨口を買はうとつて見てゐるのだよ。此のごろ、中で口金の合はさる蕨口が來たから、吃度あれを見てるのだよ。あれ、見な、源さんと定さんが遣つて來たよ。そら、橋のとこ、寒さうぢやないか。風があんなに上つ張をまくつてゐるよ。舞つてぐるぐる舞をしてゐる。お、をかし

い。

娘乙 お止しよ、人が笑はな、御覽々々、橋屋へお客が着いた。夫婦客だよ。橋屋の門松は今年是小さいこと。やつぱり不景氣だからだよ。

娘甲 また始まつた。そら、定さん達がやつて

来る。早く隠れようよ。こんな所に立つてゐて、見つかるよ。又からかふから。

娘乙 構はないよう。此方でからかつてやれ。でもあの衆も、もう上衣なんか着てゐるよ。

娘甲 源さんの上衣の模様は馬鹿に赤いでないか。夷子さまが鯛でも釣つてる所だらうか。定さんの浦島太郎だよ。ほら、来た〜。

(乙の後に隠れるやうにする)

娘乙 (すまして) こんちや。

男甲 よう〜。

男乙 もう早えおめかしか何かで、早えなあ、お前たちは。あつちの方へ行つて見べえ、一緒に

行かねえかよ。

(二人とも立ちどまり、一寸女と話し合つて、向うへ行く。女二人も、少し離れてついでに行く。すべてゆる〜と歩く。奥手の隅でまた止まる。入りかはつて次の三人出て来る)

浴客の婦人甲 御前さま、何といふ静かな町でございませう。年の暮のやうぢやございませぬね。

浴客の老人 もう春の景色だ、梅でも咲きさうだなあ。でも日が沈みかけたと見えて、段々寒くなるやうだ。

浴客の婦人乙 (仰いで町の家根越しに見える山脈を眺めて) まだあの山半分、日が射してゐますよ。日あたりは全く暖さうですことね。

浴客の老人 此の邊は枯山の色がみな暖さうに見える。枯葉が赤味を帯んで、枯れ切らない青草のやうなものも大分交つてゐる。そこへ日が射すから尙暖さうに見える。が、何だか斯う、鈍い血の色のやうに赤い山だな。

浴客の婦人甲 でも町は、かげると矢つ張り寒さうに見えるすのね。人通りの少ないだけ、尙からつとして。

浴客の老人 人間といふ奴が巢を造ると、兎角暗い蔭が出来ものだ。(間を置いて) お前、あのピストルは仕舞つて置いたらうな。

浴客の婦人乙 はい、たしかに。

(二人とも向うへ行く。入りかはりに次の二人現はれる)

書生甲 君さつき見たらう？ あの砂濱に、大儀さうに横になつてゐた、あれは皆病人なんだよ。あゝして日光を吸うては、ごろ〜してゐる。それが大抵は若い活動ざかりの人なんだから、かはいさうさ。海岸の空氣や日光を、薬を飲むやうな心持で、吸うたり浴

びたりしてゐる。あの時にこそ、全く人間は、自分の肉體が衰へ亡びて行くことを感ずるね。

書生乙 つまり、君が、身につまされるのだ。

書生甲 さうかも知れん。それ、見給へ、向うの角に柳の木が一本立つてゐて、其の手前的小流で、かみさんが煤けた小障子を洗つてゐるだらう？ 樹の下ぢや、白粉を眞白に塗つた村娘と、上つ張を着て新しい手拭を首に結んだ浦の若い衆が立話をしてゐる。そつくり繪ぢやないか。いゝね、何となく長閑な別天地といふ感がして、都會の大晦日とは違ふねえ。

書生乙 馬鹿に氣に入つたやうだなあ。まあ、もう一二月居て見なければ、分らんよ。

書生甲 全くいゝ。斯ういふ所で育つて、斯うもなしに過ごせるものは、幸福だ。斯ういふ所の若い人の顔には、見給へ、暗い運命の影なんてものは、てんで痕跡を印してゐない。彼等の太い突つ張つた聲は濤の音の反響であるし、彼等の濃い血色は、黄金色の蜜柑山や紺青の海から反射して来る光線に染め上げたのだ。造しい骨格は、あの大山脈の模型

と言つていふ。斯ういふ所からは、早く人生の悲哀を味ふやうな不運の兒は生じない譯だ。僕等のやうな、やくざな體のものは、實際、彼等の大自然と連なつたやうな健康が羨ましいなあ。

(言ひながら不圖また向うを見ると、柳の木蔭に立つてゐる甲の娘が彼のうつととした目附で此方を見守つてゐたのと、眼を見合す。娘はあわてて他を向く。書生がぢつと其の方を見てゐると、此の時忽ち、寶來屋の店先にゐた十二三許りの小僧が、長芋の藁苞にしたのを掲げて足早に通り返す。と思ふと、突然また一人、紺の上つ張に三尺を締めた若者が、突かけ下駄で足音を殺しながら走つて行く。驚いてみなく、其の方を見る途端に、若者は先の小僧に追ひつき、後から肩を掴んで、ぐつと引き戻し眺みつける) 若者 野郎、出せ、隠すな。(懐に手をつ突つ込んで茶革の小さい新しき褌口を引き出す) 此の野郎、さんざん品物をいちくり散しやがつた舉句に、之れを萬引しやがつて。ちやあんと睨んでゐたんだぞ。太え野郎め、さあ、何うしやがる。警察へ來い。警察へ來い。

小僧 (藁苞を抛り出し、頸首を取られたまゝ、うつむいて、涙ぐみ、懐を探つて) 負けて呉んなよ、買ふから。よう、負けて呉んなよ。

若者 負けて呉んなも糞もあるかい。此の泥棒め。負からなきや盗んで行くつもりか。太え野郎。ぢや、是れ、二十錢に負けてやるから買つて行け。さうすれや、今日だけは許してやる。

小僧 (紙に包んだ銅貨を出しながら) さつき長芋を買つたのが茲に二十錢のけんども、是れみんな無くしちや叱られるから、十錢に負けてくんやよ。

若者 野郎、錢も無い癖に、品物なんかいちくり廻しやがつて。初手から盗む氣で來やがつたらう? 負からねえ。其の二十錢みんな置いてけ。それでなけれや警察へ來い。(領がみを取つてこづく。大勢立つて見てゐる方へ向き、ちよつと笑つて、又小僧の頸首をゆすり) さあ、何うしやがるんだ。早くせい。大晦日だぞ。(小僧が誰々其の金を渡すのを引つたくり、褌口を突きつけて) 野郎、顔上げえ。手前は一體何處の者だ。岡の者か。名は何だ。力造? 苗字を言へ、苗字を。隠し

たつて直ぐ知れるこんだ。下を向くなつて事よ、今になつて恥かしがるにや及ばねえ。さあ、皆さんに此の顔をよく見て置いて貰ふんだ。(小僧の顔を仰向けさせて、見物の方を見、またちよつと笑ふ) 一度泥棒すれやあ、一生泥棒だぞ。おれがよく手前の顔を見覚ええといてやる。今度斯ういふ事をすれやあ、懲役だぞ。さあ、よし。是れでな、手前の顔はこゝいらの人の眼にや、泥棒といふ極印がついたんだ。悪い事をしたつて、すぐに取つ捕まるぞ。さあ、此の褌口を持つて行け。

(突き離して若者は行つた。見物人の間につぶやきの聲が一しきり起つて、去るものもあり、立つたまま小僧の爲ること事を見てゐるものもある。小僧は泣きもせず、眞着な顔をして、心もち顫へながら靜かに藁苞を拾つて、周囲の人々の顔をちらと偷むやうに見、しよんぼりとして向うへ這入る、人々四方へ散じ、二人の娘のみ残る) 娘甲 かはいさうぢやないかよ。 娘乙 何がかはいさうなものか。自分で悪い事をしたでないか。 娘甲 家へ歸つて何うするづら。あんなに顔を

曝されて、もう此の土地にや居づらからう。

娘乙 まだ子供だもの。

娘甲 だつて、大きくなつたつて人は忘れやしない。

娘乙 其のうちにや、何處かへ突つ走つてでも丁ぶつらよ。

娘甲 爲さんも、諍こそ違ふが、ちやうどあんな風にして突つ走つてけよ。

娘乙 あら嫌だ、お前まだ爲さんの事を忘れないてゐるのかよ。(笑を隠した眼で甲の顔を見るとき、甲は心持顔を赤めて)

娘甲 さうぢやないけれど、あんな風にして否應なしに旅へ出る人もあるし、源さんや定さんのやうに、出たい／＼と言つてゐて出得ない衆もあると思つたからさ。そら、源さんがお前を呼んでるによ。

娘乙 いやだ、あんな手つきをして呼んでるよ。さあ行つて見ようよ。(つれ立つて去る。今まで向うの店の前に背中を見せ立つて居た二人の書生、こちらを振り向いて無言のまま、娘の跡を見送つてゐると、段々暗くなりかけた柳の木のある邊から、旅舎の軒の電燈が二つ三つぱつと點つて来る)

(幕)



▲西洋で、寫生文として最も古いものは、ボカチオの作デカメロンの緒言であらう。殊にその前半がさうである。千三百四十八年から九年に涉つて、フロレンスの町に悪疫が猖獗を極めた。七人の宮女と三人の紳士とが、それを數哩の市外に避けて、どうせ長くは生きぬのだから、生ある中、出来るだけ氣儘に暮して、逸樂を縱にしよといふ所から、百物語の發端は起つて來るのだが、まだその前渠等が市外に去らぬ前に、市民が疫病の襲ふ所となつて悶え苦しむ有様、續々と枕を立てて死んで行く慘鼻の様から、片附けるものもない死屍を餓えた犬が食ひ食つて、忽ち病毒に感染して、その儘斃れて行く様なぞを歴然と目の前に浮ぶやうに描き出した所は、疑ひもなき寫生文である。

▲今の所謂寫生文は未完成のもの、無形式のもので、それだけで、完成したものと見ることは出来なからう。いはゞ寫生文は、手習ひにいゝ、他日完成したものを作るべき準備として、筆ならしをするにいゝ、筆力を養ふにいゝ。それのみで満足して、進まなかつたなら

らば、或は何の役にも立たぬかも知れぬ。

▲尤も、未完成のものが、すべて必ず興味がないとは限らぬ。レンブラントのスケッチは、雪舟の墨繪にも比較すべきものであるが、その下書である所にまた一種の興味は無論あるが、然し、スケッチでいゝものは、それが完成せらるればなほいゝ如く、未完成の寫生文もそれが完成すればなほいゝものとなる譯である。

▲寫生文の興味は、下繪の興味と同じであるといつたが、或は現に今の寫生文の中にも、渾然とした興味を興ふるものがあるといふかも知れぬ。自分が前にいつたのは、所謂寫生文なるもの全體についてのことだ、説者の言の如きものも實際あるに違ひない。けれども、これについては、自ら異つた解釋をしなればならぬ。即ち、文學の上には、初中終の形式がなく、表面はなしにではないけれども、作者の内生命即ち感じの上に一種の形式がある。換言すれば、作者心内の感じをもつて散漫な文字以外に、その文章を統一してゐる點があるのだ。さればこの意味より云へば、この種の寫生文は、形式もあり、完成されてゐると、いつてよいのである。(今の寫生文より)